

# BC-PAP 患者・市民参画プログラム セッション 抄 録

BC-PAP 患者・市民参画プログラム セッション |

## BC-PAP 患者・市民参画プログラム セッション1

## 乳がんサバイバーシップ：運動・栄養・代謝

**BC-PAP1****乳がん患者における運動および食事の重要性、生活習慣改善のための工夫**

リオール株式会社 パーソナルトレーニング事業部  
奥松 功基

運動は乳がんの予後改善に効果的と多数報告されており、乳癌学会ガイドラインでも身体活動量を増やすことが推奨されている。また、過度な肥満は乳がん再発リスクを上昇させるため、適正体重の維持も求められる。体重コントロールには、運動実践よりも食習慣改善の方が約3倍効果が高いと言われており、予後改善のためには運動だけでなく食習慣改善の重要性も高い。

一方、乳がん治療により体力の大幅な低下や、体重増加が起こりやすいことも先行研究で報告されている。現場においては「乳がん手術後にどの程度体を動かして良いか分からない」や「食事の際に何をどれくらい食べていいか不安」という声も一定数存在し、適度な運動実践や食習慣改善に向けて様々な障壁が存在する。

本シンポジウムでは、乳がん患者を対象に運動介入や食事摂取量調査をおこなってきた筆者が、運動や食事の重要性および、それらを実生活に取り入れるための工夫などを解説する。

## BC-PAP 患者・市民参画プログラム セッション2

## 「乳がん周術期の薬物治療最前線」のホットトピック

**BC-PAP2-1****ホルモン受容体陽性HER2陰性乳がん周術期薬物療法up to date!!**

国立国際医療研究センター病院 がん総合内科/乳腺・腫瘍内科  
下村 昭彦

乳がん薬物療法の進歩は著しいです。転移・再発乳がんはもちろんのこと、周術期薬物療法も毎年標準治療に変化があります。現在推奨される治療と5年前とは全く異なる薬剤が多く使われるようになってきました。その一方で、周術期に使用される化学療法（抗がん剤）は基本的には変わっていませんし、治療を選択する場合に考えるべきポイント（どうリスクベネフィットのバランスを判断するか）は変わりません。このセッションでは周術期薬物療法選択の基本的な考え方と、最新のホルモン受容体陽性HER2陰性乳がん周術期薬物療法について学びます。

**BC-PAP2-2****「乳がん周術期の薬物治療最前線」HER2タイプ、トリプルネガティブタイプなどについて**

筑波大学 医学医療系 乳腺内分泌外科  
坂東 裕子

乳癌に対する薬物療法は複雑化しています。HER2タイプおよびトリプルネガティブタイプに対する周術期治療について概説します。HER2タイプは抗HER2抗体+化学療法（いわゆる抗がん剤）が中心となります。トリプルネガティブタイプは、化学療法+/-免疫チェックポイント阻害剤が標準治療とされ、治療強度が高いことが特徴となります。また、その枠組みの中でも治療の選択肢はいくつかあります。新たな治療薬はどのように有用性が評価されてきたのか、そして新たな有害事象（いわゆる副作用）にどのように対処していけばいいのか、それぞれ治療の選び方など、紐解いていきましょう。また今後どのような治療が開発されつつあるのか、などもご紹介できればと思います。

## BC-PAP 患者・市民参画プログラム セッション4

## 災害時の患者支援活動と学会との連携

## BC-PAP4-1

## 災害時の患者支援活動と学会との連携 ―熊本地震を通じて―

熊本大学 乳腺・内分泌外科

山本 豊

日本では、1995年の阪神淡路大震災以降、地震だけでなく台風や豪雨などの災害が頻繁に発生しています。いつどこで災害に遭うかはわからない状態です。災害発生直後の対応については、国や自治体が中心となり、対策が充実してきています。しかし、がん患者さんに対する災害時の対応はまだ十分ではありません。そんな中で、日本乳癌学会は乳がん患者さんを支援するための取り組みを行ってきました。私自身も熊本地震を経験し、その際にどのようにして、地元の医療機関や本学会と連携し患者さんを支援してきたかを具体的な事例を交えながらお話ししたいと思います。また、災害には備えが大切ですので、災害前の準備や災害時の心構えについてもお伝えし、皆さんと一緒に今後の災害対策について考える機会にできればと思います。

## BC-PAP4-2

## 災害と患者支援と

一般財団法人周行会 内科佐藤病院 薬剤科

今野奈央子

ひとは、病名告知を受けた瞬間から、『健康だと思っていたいつもの自分』から、『病気を抱えた自分』へと変わる。生活も同様で、『いつもと同じ日常』が災害発生により『非日常の連続』へと変わる。常々薬剤師として、治療薬による有用性についての薬学的管理はもちろんのこと、副作用マネジメントを目的に個々の患者さんに寄り添う対応も重要な責務だと考えている。がんは治療が長期に亘り、災害時に治療開始前や治療中、直後、長期フォローアップ中など様々な方がいるが、災害発生時は急性期の治療が優先され、がん治療へのアプローチが鈍くなったり、トリアージが掛けられ治療中断を余儀なくされる場面に多々出会う。その結果、治療に関する不安が生活基盤を失った不安に上乗せされがちである。今後も起きうるであろう災害時にどのような患者支援活動が望まれるのか、東日本大震災の際の経験を振り返りつつ、薬剤師の立場から考えてみたい。

## BC-PAP 患者・市民参画プログラム セッション5

## 「乳がん治療の手術／放射線」のホットトピック

## BC-PAP5-1

## 乳がん治療における手術について

昭和大学 臨床ゲノム研究所 乳腺外科  
小島 康幸

癌の集学的治療において手術は最も古くに始められた方法であり、いまだに治療の根幹を成す手段として用いられています。乳房にできる乳癌を根治させることが最大の目的である一方、ボディイメージをいかに保った手術を提供するかが外科医に課せられた課題です。そもそもなぜ手術が必要なのか？手術による身体の変化を少なくすべく、数多くの工夫がこれまで試みられてきました。部分的な切除に留めて放射線照射を併用する方法、失われた乳房を手術で再建する方法、摘出するリンパ節を最小限にする方法や、薬物療法によって腫瘍を小さくして切除を最小限にする方法、そして条件が許せば切除しない方法も選択できるようになってきました。一方で、乳癌卵巣癌症状群では対側乳癌の予防目的にリスク低減手術として乳房全摘が勧められることもあります。手術を受ける意味がどこにあるのか？について一緒に考えてみたいと思います。

## BC-PAP5-2

## 乳がん治療における放射線治療

## ～あなたの疑問に答えます Part II～

滋賀県立総合病院 放射線治療科  
山内智香子

乳がんの治療において、放射線治療は手術や薬物療法とならんで重要な役割を果たしています。しかしながら、患者さんやそのご家族にとっては、手術や放射線療法と比べて、その原理や役割・方法などはわかりづらく学ぶ機会も少ないと思います。本講演では昨年に引き、日常診療の中で患者さんやご家族からよく質問される以下の事項を中心に、できるだけわかりやすく解説します。

- ①なぜ放射線治療は「がん」に効果があるのでしょうか？
- ②乳がんは放射線治療が効きやすいのでしょうか？
- ③手術後の放射線治療はなぜ必要なのでしょうか？
- ④放射線治療の回数はどのように決まるのでしょうか？
- ⑤放射線治療が必要な場合、乳房の再建は出来ないのでしょうか？
- ⑥放射線治療で転移は治らないのでしょうか？

## BC-PAP 患者・市民参画プログラム セッション6

## 緩和ケア・支持療法の基本

## BC-PAP6

## がん治療中からの緩和ケアのすゝめ

東北大学大学院 医学系研究科 緩和医療学分野

井上 彰

緩和ケアを「余命わずかな患者さんの苦痛を取るため(だけ)の医療」と誤解している方は一般市民のみならず医療者にも依然多いですが、国際的には「早期からの緩和ケア」が常識になっており、我が国の施策でも「がんと診断された時からの緩和ケア」は重点課題とされています。その際の緩和ケアの役割は、痛みや吐き気などの「身体的苦痛」への対処だけでなく、精神的・社会的・霊的な苦痛への対処も含まれ、多職種が連携して最善を尽くします。がん診療連携拠点病院では、このような質の高い緩和ケアの実践が義務づけられていますので、患者さん、ご家族には是非その仕組みをご活用いただき、より良い療養生活を送っていただければと思います。もし主治医が緩和ケアを十分に理解していなくても、各施設の「緩和ケアチーム」や「がん相談室」は何らかの助けになるはずで、本講演が少しでもご聴講の皆さんのお役に立てれば幸いです。

## BC-PAP 患者・市民参画プログラム セッション7

## 「乳がん転移再発後の薬物治療」のホットトピック

## BC-PAP7-1

## 転移再発後の薬物療法最前線 -HER2陽性とTNBC-

がん研究会有明病院 乳腺内科、先端医療開発科  
尾崎由記範

転移再発乳癌に対する薬物療法は年々変化しており、さまざまな薬剤の使用が可能となり、複雑化してきている。HER2陽性乳癌に対しては抗HER2抗体薬と化学療法に加え、抗体薬物複合体エンハーツが使用可能となり、その適用はHER2低発現の乳癌に対しても広がった。またトリプルネガティブ乳癌に対しては化学療法と免疫チェックポイント阻害薬が使用されている。その一方で、重篤な副作用を発症するリスクもあり、その予防やマネジメントについては依然として課題が残されている。サブタイプやバイオマーカーに応じた薬物療法の使い分けについて、新規薬剤に関する最新情報を交えながら概説していく。

## BC-PAP7-2

## 「乳がん転移再発後の薬物治療」のホットトピック

国立がん研究センター中央病院 腫瘍内科  
齋藤亜由美

乳がんの薬物療法は年々複雑化する中、ホルモン陽性HER2陰性乳がんでもホルモン剤、抗がん剤、分子標的治療薬など複数の新薬が出現してきています。このセッションでは転移再発時のホルモン陽性HER2陰性乳がんの治療現状と今後の展望について解説します。最新の治療法やその効果副作用など、みなさんの参考になるような内容をお話したいと思います。